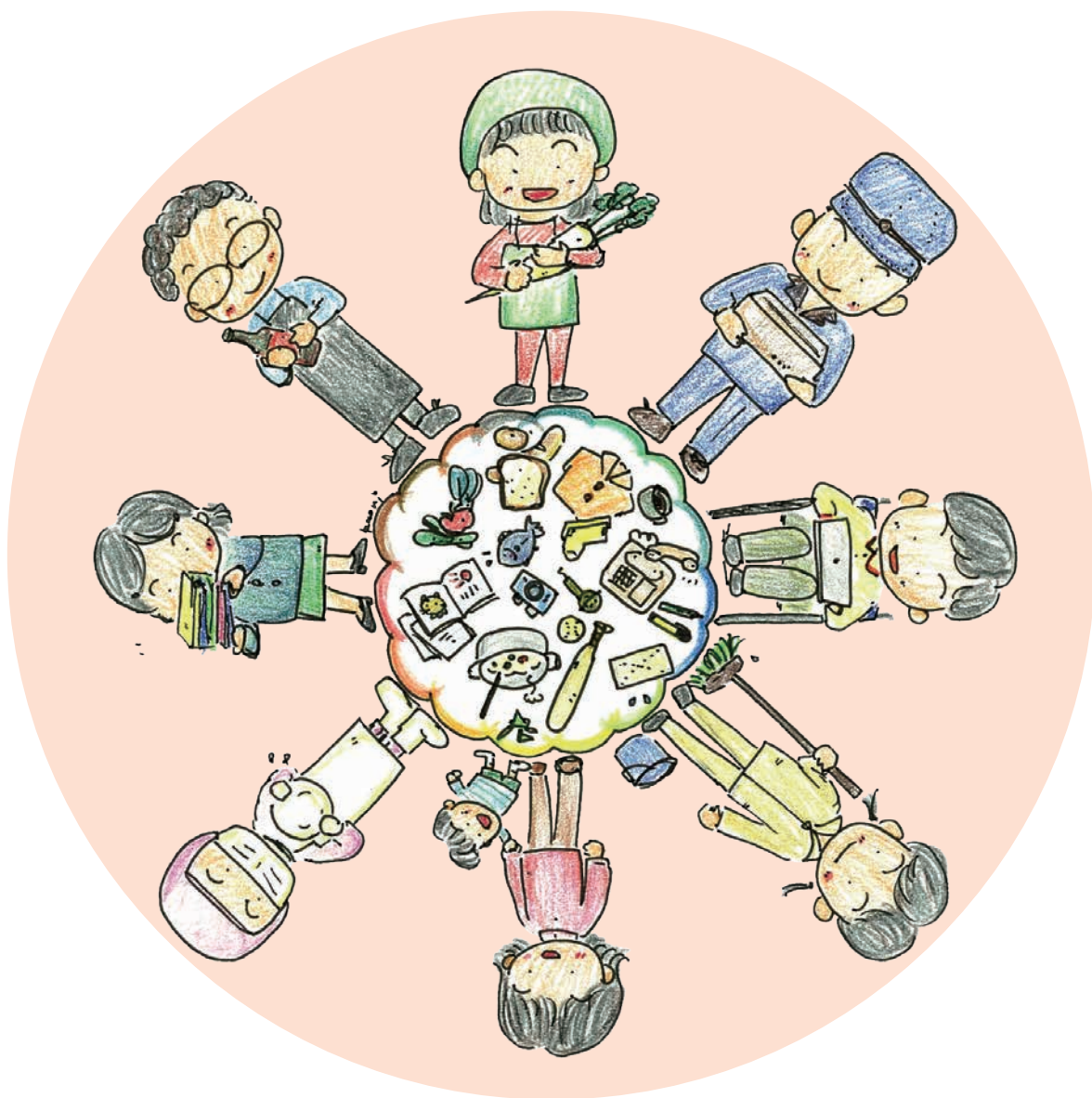


社会人への第一歩 一緒に働こう！

障害者職場開拓における職場実習・雇用受け入れ事例集 No. 6



はじめに

船橋市では、障害のある方の一般就労を支援する取り組みの一環として、職場実習の受け入れ事業所を開拓しています。

一般就労を希望している障害のある方は、「特別支援学校」の生徒や「障害者就業・生活支援センター」の利用者など多数いらっしゃいます。適した仕事や障害の特性も、人によってさまざまです。障害のある方を長く雇用するためには、その方の特性を把握した上で雇用することが重要です。

当市においても、職場実習は個人の特性や事業所との相性を雇用前に確認できる有効な手段と考えております。

そこで、市内在住の障害のある方の職場実習の機会を増やすため、専任の開拓員が市の内外を問わずさまざまな業種の事業所へお伺いし、障害者雇用の状況や計画についてお聞かせいただいております。お話の中で、職場実習及び雇用の受け入れについて検討されている事業所には、障害者支援をしている機関の担当者をご紹介します、職場実習につながるよう支援いたします。

この事例集は、開拓員が実際に事業所を訪ねて支援機関に紹介し、職場実習が行われたケースを取りまとめ、皆様にご提供いたします。障害のある方の受け入れを考える時の、「今までに雇用したことがない…」「何に気をつければいいの?」といった不安や疑問への参考にご活用いただけますと幸いです。

船橋市経済部商工振興課



奨励金制度のご案内

船橋市は奨励金制度として「障害者職場実習奨励金」及び「雇用促進奨励金」をご用意し、障害のある方を受け入れる事業所の負担を軽減する取り組みを行っております。ぜひご活用ください。

<<船橋市雇用促進奨励金>>

市内事業主が、ハローワークを通して市内在住の高年齢者（55歳以上）、あるいは障害のある方を採用し、1年以上継続した場合に支払われる奨励金です。

市税の滞納がない事業所で、対象労働者を雇用保険に加入させている必要があります。

雇用した時は、雇用した日の属する月から6ヶ月以内に必要書類をそろえて申請してください。

その後、雇用した日の属する月の翌月から12ヶ月後、実績報告書を提出していただきます（実績報告の提出につきましては、時期が近づきましたら申請のあった事業所に個別に通知しております）。

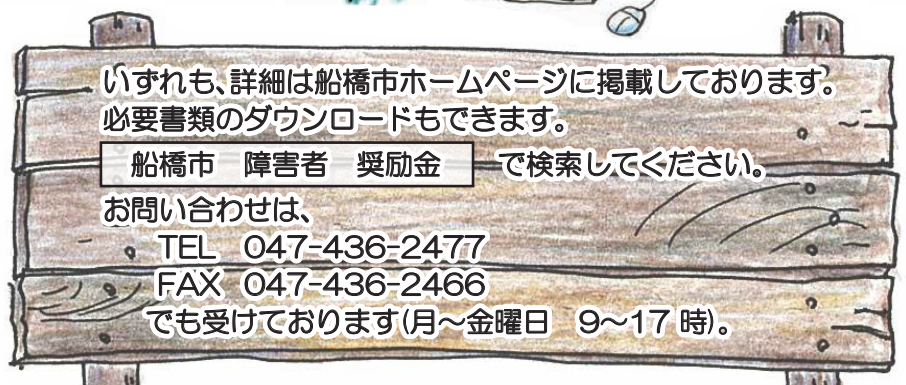
対象労働者ひとりにつき18万6,000円を、審査の上で交付します（1回のみ）。

<<船橋市障害者職場実習奨励金>>

市内在住の障害のある方をあっせん者（特別支援学校、障害者就労支援事業所等）を通じて職場実習を受け入れた場合、ひとり1回につき5日以上の受け入れに対し、**2万円を交付**します。

実習に対する報酬、交通費や食費などの事業所負担はありません。

実習先および事業所の所在は、船橋市外でもかまいません。



障害がある方の職場実習先を開拓・紹介しています

ランドロームジャパン株式会社（船橋市三咲）

スーパーマーケット

① 開拓員による事業所アンケート調査

職場実習先開拓員が事業所のご担当者を訪ね、お話をしながら、アンケートに協力していただけるようお願いします。あわせて、各種奨励金のご案内もしています。

こちらの会社は船橋市内に本社を持ち、千葉県を中心に約 20 店のスーパーマーケットを運営しています。

昨年度、連絡をしたところ、総務・人事課長の金子政司さんがアンケートに協力してくれました。

アンケートでは、障害者雇用の状況、実習・雇用の受け入れに対する考え方を聞きました。すると、「障害のある方は 5～6 店舗で雇用しているが、いずれ全店で受け入れたい」と答えがありました。



② 特別支援学校・就労支援機関に紹介

職場実習の受け入れや雇用を検討していただけると回答のあった事業所に、特別支援学校や就労支援機関を紹介しています。障害の特性や仕事の切り出しなどを具体的に聞く機会です。

既に以前から、いくつかの特別支援学校とはつながりがありましたが、改めて市立特別支援学校を紹介することができました。

その結果、バックヤードで野菜の袋詰め、店頭の品出しといった内容で実習の受け入れが可能になり、「千葉県特別支援学校就労支援ネットワーク連絡会」を通し、県内全域から実習希望者を募りました。

この連絡会は、千葉県内の特別支援学校約 40 校を 6 地区に分け、連絡・調整を図りながら、学校はもとよりハローワークや支援機関などと連携をとって就労支援をすすめるものです。

③ 職場実習の実施・振り返り

実習希望に対する受け入れの具体的な調整、心配事の解決を、開拓員が介して行います。実習中は支援者が訪れ、本人や事業所のサポートをします。

金子さんと特別支援学校、開拓員の調整により、数店舗で実習の受け入れが決まりました。

ランドローム三咲店では、高等部 1 年生の男子 A さんが野菜の袋詰めをしました。パートで働く女性たちは、彼を励ましながら接してくれ、本人も真面目に丁寧に作業をしました。

A さん本人の希望で 2 年生の時も店舗で実習を継続。毎



回、課題を自分で決めて実習に臨んでいます。前回教えてもらった手順もしっかり覚えており、現場からも良い評価を得ています。



④ 雇用に向けて

実習の最後には、本人、支援者、保護者と実習内容を振り返ります。雇用を見込んだ実習の場合、事業所の合意ができれば、雇用に向けての準備を進めます。雇用条件の話し合いには、支援者が立ち会います。

来年度は、A さんと店舗が望めば実習が継続されます。彼は 3 年生になるので、今までとは違い、就職を前提として本人と保護者、店舗でその可能性を考えていくことになります。

⑤ 雇用後

本人の就職後も、学校や支援センターが定着支援を続け、開拓員が事業所と本人の調整役をつとめます。船橋市は、要件を満たした実習・雇用について奨励金を交付し、また、支援機関と連携をとって、随時、事業所の状況を確認しながらサポートいたします。

実習の受け入れは、店長と青果責任者が責任をもって面接をおこなって決めています。店長には「評価が厳しい時は、本人のためにもはっきり言ってください」と任せ、採用についても現場の意見を重視しています。



管理部総務・人事課長
金子政司さん

日本クッカー株式会社船橋工場（船橋市高瀬町）

惣菜等製造



昨年、船橋工場が稼働

こちらの会社では、八千代工場で障害のある方を長く雇用していました。

平成 27 年秋、新たに船橋に工場を作ることになり、八千代工場から異動した管理部の方が、付き合いのあった特別支援学校に連絡をくれました。

県内 9 校の進路担当教諭と共に、開拓員も工場を訪問しました。

食品容器の洗浄で雇用を検討

管理部主任の吉田 仁さんは、八千代工場でも労務を担当。八千代では、食品を入れる容器（バッカン）の洗浄、清掃、盛り付けで、障害のある方の雇用をしています。

しかし、船橋工場はそれより規模が小さいため清掃の仕事はそれほどなく、「現状では容器洗浄での雇用を考えている」と説明。先生方は現場を見学しながら、実際の作業手順を詳しく確認しました。

外国人が多い現場

製造現場で働く従業員のほとんどが外国人。工場内の手洗い場には写真入りの手順書が、ロッカーにはひらがなによる注意書きが貼られています。「見て理解しやすいので、障害のある方にとってもありがたいことです」と、特別支援学校の先生が話していました。

多様な従業員に対応するための下地が、既にできていると感じました。

担任教諭がアドバイス

3 年生の B さんがこの仕事を希望したので、学校間での了解を経て吉田さんたちによる面接が行われ、船橋工場での初めての実習が始まりました。

製造部署で使用済み容器を機械で洗浄する仕事で、「送り手」「受け手」が息を合わせて作業をします。

B さんは「受け手」。「送り手」が洗浄機のコンベアに容器をセットし、洗浄されて出てきた容器を B さんが受け取り、種類別に台車に積みます。

初日には担任教諭が付き添いました。

「送り手」は外国の方だったので、ジェ

スチャーを交えて「スローリー！」と繰り返しました。それを理解して、容器の種類が変わる時には B さんに示して、ゆっくり機械にかけるようになったそうです。

実習期間	2 週間 × 2 回
実 習 生	特別支援学校高等部 3 年
実習内容	容器洗浄

2 回目は仕事の幅を広げて

B さんの希望で、半年後に 2 回目の実習を実施。

吉田さんたちが見ている時、「受けるタイミングがずれ、容器がコンベアから落ちそうになりましたが、片手で流れてくる容器を押さえながら、落ちそうな容器をもう一方の手で取り上げた」ことが。

決まった作業はちゃんと覚えてこなせますが、「臨機応変」に判断することが苦手な方なので感動し、「送り手」も任せてみようと思ったそうです。

「受け手」の様子を見ながら容器をコンベアに載せ、タイミングをみて床の洗浄や容器回収もしなければなりません。



最初は自分の仕事に集中してどんどん流していたので、吉田さんは、「一生懸命やっているのはいいが、『受け手』を見て。前回の実習で自分が『受け手』だったことを思い出してごらん」とアドバイス。午後には、考えながら動くことができるようになっていたそうです。

「息抜き」できているか

吉田さんが「疲れていないか」「困ったことはないか」と声をかけても、「大丈夫です」としか言わなかった B さんですが、送迎バスで一緒になった人に「疲れた」と話していたことを聞き、「管理側の人間には言いづらいのかも。こうして息抜きができていれば安心」と、障害のある方の雇用経験が長い吉田さんは言います。

労務担当になった時、特別支援学校の見学をして、木工やミシンの作業をする生徒たちを見て驚き、認識が変わりました。

まずは接してみることに。そして、障害のある方のスキルを把握した上で、何度も丁寧に話し経験を積んでもらうと、本人のできることも増えていくでしょう。



管理部主任
吉田 仁さん



船橋の物流センターでも雇用に取り組む

関東・東北にいくつもの拠点を持つこちらの会社では、障害のある方の雇用に、積極的に取り組んでいます。

埼玉の物流センターでは、近くの特別支援学校から実習、雇用をしましたが、「新たに船橋にある千葉物流センターでも」と考え、本社人財部人事課マネージャーの濱田 裕さんは、いくつかの特別支援学校を訪ねました。

食品の仕分けや運搬、清掃を提案

しかし、埼玉のセンターは飲食店用の食品を扱っているため、日中も仕分けなどの作業がありますが、千葉物流センターで扱うのはスーパーマーケットに納品するチルド商品であるため、仕分け作業のピークは深夜なのです。

そこで濱田さんは、特別支援学校の先生や障害者支援センターの支援員に、「仕分けが済んだ台車の運搬、休憩室の清掃などで雇用ができないか」と提案をしました。

「工業団地に位置し、公共交通機関での通勤が不便なので、ぜひ近くに住んでいる方を雇用したい」と濱田さんは話しました。

仕分けの準備で実習が決定

「仕分けの準備であれば日中の作業が可能」とまとめ、これを中心に実習希望者を募ったところ、高等部3年生のCさんから希望があり、受け入れを決めました。

朝、一斉にトラックが出て行ったあとに仕事が始まります。まずはお昼の便のために、仕分けの済んだ台車をトラックの積み込み口まで運ぶ作業です。

付き添った担任教諭が、積み込み口の見取り図とトラックの番号をカードにし、彼の首からかけられるように工夫



しました。Cさんは最初、これを見ながら運んでいましたが、すぐに覚えたそうです。

特性と仕事

Cさんは、人とのコミュニケーションが苦手で、行動にこだわりを持つタイプの方です。

しかし、現場では黙々と作業をこなし、丁寧な仕事ぶり

につなげて、高評価を得ました。

「学校では駅伝競走の選手だったそうで、体力があります。飲料ケースは重いのですが、手を抜かず積み替えをしてくれました。持久力があるのはいいですね」と、濱田さんも喜びました。

他の人とニコニコしながら話をすることはありませんが、必要なことはちゃんと聞いて、指示を仰いでいたそうです。

雇用を見込んで実習時間を延長

「彼はこだわりたい部分がいくつかある人で、先生から『嫌なことははっきり嫌と言う』と聞いていたのですが、その彼が2回目の実習の振り返りで『ここで働きたい』とはっきり言ったので、うれしかったです。生徒のこの言葉には、先生も驚いていました」。

こうして3回目の実習では、雇用後を考えて時間を延長しました。昼食をはさむことになりましたが、環境にも少しずつ馴染んできたように見えます。



将来的には他の仕事も任せたい

「実習では、どこまで任せられるか様子を見ていましたが、一緒に働いてもらうことになったら、仕分けの作業もお願いしたいですね。その他にも、やってもらえることはあるかもしれません。順調にいけば、その日も近いのでは」と、濱田さんは期待を寄せています。

最初は、この業界で障害のある方を雇用するのは難しいと思いました。しかし、本人に会って話をしてみると、いろいろな可能性があると感じました。

今まで自分たちがやっていた仕事の一部を任せ、自分たちは他の仕事で生産性をアップさせればいいのではないかと、と思っています。

もちろんたいへんな部分はありません。伝えたいことがうまく伝わらなかったり、望む仕事を任せられなかったり。

でもまず、会社も本人も受け入れることが大切だと思います。そこからお互いが良い方向に向かっていくことができれば、と思います。どうぞ一度、体験をしてみてください



人財部人事課
マネージャー
濱田 裕さん



本社と保育施設で障害者雇用

保育、教育、介護サービスを提供するこちらの会社では、現在、本社といくつかの保育施設で障害のある方を雇用しています。

その種別は精神・身体・知的とさまざまで、仕事の内容は事務、保育施設の清掃、保育補助など。「その方にできることをやってもらう」と、本社人事部マネージャーの加藤 晃さんは言います。

保育施設で清掃や保育補助

開拓員は、既に3人の障害のある方を雇用している保育施設を、特別支援学校の先生と共に訪れました。特別支援学校を卒業後就職し、2年になる女性の様子を見学させてもらったのです。

駅前ビルの3フロアを占める施設で、朝は階段やフロアの清掃をするところから始まります。その後、保育室に入って、子どもたちの制作物の準備や昼寝用の布団敷き、行事の練習を見守るなどをしています。

この方は片手が少し不自由です。ある日、子どもに「どうしてこっちの手を使わないの?」と聞かれ、「使わなくても食器を運べるよ」と答えていたのを見た施設長は本人の理解を取り、めがねをかけたぬいぐるみを使って「世の中には、さまざまな状態の人がいるんだよ」と、子どもたちに伝えたそうです。

「子ども好き」な生徒の実習

特別支援学校の生徒にも、子どもと遊ぶことが好きで、将来の仕事先に「保育園」を挙げる方がいます。こちらの会社では、希望者の住まいからなるべく近い施設を選んで、実習の受け入れをしています。

今回、ナーサリースクールすみだで実習をすることになったDさんは船橋市在住ですが、「一番近くて受け入れ可能な施設」ということでここに決まりました。

この施設での実習受け入れは初めてです。施設長である築地慶枝さんは、「障害のある方を雇用している施設で様子を聞いて、対応の参考にしました」と言います。

Dさんの面接には加藤さんも同席し、「子どもに興味があるか」「どのくらいの時間ががんばることができるか」を見て、

実習内容を「子どもの遊び相手、制作物準備」と決めたそうです。

実習期間	2週間×1回
実習生	特別支援学校高等部1年
実習内容	保育補助

折り紙や絵本の読み聞かせを

「子ども好き」とは言っても、「最初は公園に行っても遠くから見ていただけでしたが、だんだん一緒に遊ぶことができるようになりました」と築地さん。

Dさんと話中で「折り紙が得意」と知り、子どもたちに教える役目を任せたと。また、「自分から『絵本の読み聞かせをしたい』と提案したので、家から持ってきた本をみんなの前で読んでもらいました」。



課題と解決方法を考えさせた

休憩の時、築地さんは「今日はどんなことが難しかったか。解決のためにどう工夫したらいいか」をDさんに問い、ノートに書いてもらったそうです。

「自分のエプロンのひもを結べなかった」「はさみの持ち方」「子どもと手をつなぐ」…などの課題に、家で練習をしたり自分で工夫をしたりして、実習の終わり頃にはできるようになったこともあるようです。

「わからないことはすべて書き留めて、読んで振り返るように言いました」と言う築地さんですが、「初めに『どこまでできるようになりたいか』の目標を、担任に確認しておけばもっと対応がスムーズにできた」と感じています。

言葉を変えて伝える工夫

「普段、自分たちが使っている言葉がDさんに伝わらないことがありました。でも、違う言葉で言い換えたり、何度か繰り返したりすれば理解してもらえたので、時間をかけることの大事さを感じました」と、最後に築地さんは話していました。



「障害があるから保育園で働くのは無理」と考えている方には、「子どもが好きならぜひチャレンジをしてみてください」と言っています。

保育施設の仕事には、清掃や保育準備などいろいろありますので、その方にあったものが見つかるかも知れません。

受け入れに理解のある施設長を増やしていきたいと思っています。



本社人事部マネージャー
加藤 晃さん(左)、
ポピンズナーサリースクールすみだ
施設長 築地慶枝さん



一般中高生の実習受け入れは経験あり

以前、市内芝山に構えていた店を馬込町に移し、ペットのトリミングや預かり(ホテル)をしています。数人のスタッフが働くアットホームな雰囲気の店舗では、毎日 20 頭ほどの犬の世話をしています。

今までにも、トリマーを目指している専門学生の実習や、地域の中学生の職場体験の受け入れをした経験があるそうです。

動物好きな高等部生徒が希望

特別支援学校 1 年の E さんがここでの実習を希望したのは、店が移転する前のこと。この近所に住んでおり、よく店の前を通っていたそうです。動物が好きで、犬の世話をしたいと思ったのです。

そこで、開拓員と特別支援学校の先生が、受け入れが可能かを確認するために訪れました。

清掃を中心にした実習

トレーナーの押田菜里さんは、「お客さまのペットを預かる仕事なので、けがをさせたりさせられたりすることが一番心配」としながらも、「実習の受け入れは可能です」と答えてくれました。

もちろん、ペットのトリミングなどはできないので、実習の主な仕事は清掃。犬の毛が抜けるので、日に何度かの清掃は欠かせません。

学校側から、掃除に使用する用具を聞いたところ、「掃除機やぞうきんを



使います」と押田さん。そこで E さんには、事前に学校や家庭で扱い方を練習してもらうことになりました。

実習前の面接時には店が馬込町に移転していたので、E さんの保護者と通勤の手段も確認。バスで通うことが決まりました。

実習生について詳しく説明

押田さんは、「面接では、先生やお母さんから E さんの性格や特性をていねいに説明してもらいました」と言います。

障害のある方の実習は初めてなので、「どこまで任せられるか、どこまで付き添ったらいいか」を考えるための、よい参考になったそうです。

また、初日には担任が付き添ったことも、安心材料になったと話してくれました。

手本を見せながら具体的に指示

E さんについては、「一度の指示ですぐ理解することは難しいようだったので、最初は確認も含めて、やってみせながら指示をしました」と、押田さん。「掃除機をかけて」と言うだけではなく、「どこから掃除機を持ってきて、どこからどこまでの範囲を、どういうやり方でかけるか」を伝えたそうです。

犬を入れるケージや荷物を移動させながら掃除機をかけた後、床に消臭スプレーを吹きながらモップがけをします。その他、エサ用の食器を洗ったりもしました。



好きな犬と触れ合う時間も

押田さんは、「仕事が一段落したら、犬の相手をしてもらいよ」と E さんに言ったそうです。

もともと動物が好きでこの仕事を希望した E さんは、楽しそうに犬と触れ合っていたそうで、「家でお母さんに報告したと聞きました」(押田さん)。



初めはおとなしく無口なイメージがあったそうですが、慣れてくるとあいさつや返事もしっかりでき、自分から押田さんたちに話しかけるようになったそうです。

「動物と触れ合うことでいやされ、緊張が和らいだのかもしれない。」

相手にするのが動物なので、どうしても神経を使わなければならない部分はありますが、今後も、実習の受け入れは検討していきたいです。



押田菜里さん



障害のある方、高齢者などの働く場に

株式会社エスプールプラスが、クライアントである企業と就労の機会が少ない方々を結ぶ目的で設立したのが、「わーくはびねす農園」です。

クライアント企業がここで農園を利用して障害のある方や高齢者を雇用し、エスプールプラスが定着のサポートをするという、新しいビジネスモデルをとっています。現在、千葉県 6 ヶ所、愛知県に 1 ヶ所で農園を運営しています。

船橋市内に新しくできた「船橋ファーム」では、最大 96 人の障害者就労の場にする予定だと言います。

安定した仕事が自立につながる

この農園では、軽石からできた砂を発泡スチロール製の箱に敷いて作物を育てています。

ビニールハウスでの作業ですので季節によって寒暖の差はありますが、ある程度、安定した作業量が確保されるそうです。「自然と触れ合いながら、障害のある方が能力に応じて無理なく働くことができ自立につながる」と、農園長の伊藤文彦さんは、障害のある方が農業に関わる効果について話してくれました。



体験実習は欠かせない

船橋ファームはオープンから間もないため、まだ全エリアがクライアントとなる企業で埋まっています。

それでも、千葉県内の他の「わーくはびねす農園」の例を知って、「ここで働きたい」という障害のある方が、次々に訪れます。「まず、ここでの仕事が合っているかの体験を、必ずしてもらいます」と伊藤さん。最低 1 週間は体験実習

をやってみた上で、本人の適性や障害特性を確認して、次のステップに進みます。

実習期間	2 週間×1 回
実 習 生	特別支援学校高等部 3 年
実習内容	農作業

今回、実習を行った特別支援学校 3 年の F さんは、農作業に従事したいと希望したそうです。他の支援機関から推薦されてきた数人の実習生と共に、作業を行いました。

実習は障害知識の豊富なスタッフが

実習指導は、同社の系列である障害者就労支援事業担当が担い、障害に関する知識が豊富なスタッフが様子をみています。

特別支援学校で農耕経験がある F さんは、シャベルの扱いにも慣れていますが、砂をふるいにかけて乾かし、混入物を取り除く手順をすぐに覚えました。



巡回に来た学校の先生に「どんな仕事をしていますか？」と聞かれると、F さんは発泡スチロールの箱を見せながら説明し、「ここで働きたいです。がんばっています。紹介してもらってありがとうございます」と元気に報告していました。

ノルマを課さず急かさない

実習を終えた方には、クライアント企業への紹介を希望するか確認します。その後は、企業がその方の雇用を検討するのですが、「紹介した方はほぼ採用され、他の農園も含めて定着率は 95%を誇ります」と伊藤さんは胸を張ります。

ここで育てた農作物は、主に企業の福利厚生に利用されているそうです。「そのため、量や納期のノルマはなく、また見栄えのいい物を作る必要もありません。会社からは定期的に彼らの様子を見に来てもらうので、本人たちにとっても働く励みになります」。

笑顔で「通って来たい」と思われる場に

各農園で働いている 8 割以上が、知的障害のある方で、重度の方もいるそうです。

障害のある方に限らず「『働きづらい方』が働いて自立をめざす」後押しをしている伊藤さんは、「この農園で働くだけでも笑顔で、『毎日、通って来たい』と思ってくれる場にしたい」と話しています。

この船橋ファームがオープンするのを機に、人材派遣の営業から異動になりました。障害者就業・生活支援センターで働いていた人が職場にいたこともあり、「障害者雇用」に抵抗はありませんでした。

農業も障害のある方も初めての経験ですが、スタッフとともに「笑顔で働く場」にしたいです。



農園長
伊藤文彦さん



障害者雇用優良事業所表彰

船橋と八千代、千葉の3市で介護施設を運営しているこの会社では、住宅型有料老人ホーム「レビー船橋」で4人の障害のある方を雇用しています。

その取り組みにより、昨年度の「船橋市障害者雇用優良事業所表彰 ふなばし♡あったかんぱにー」に選ばれ、表彰を受けました。

精神障害、知的障害のある方々が、事務や清掃の仕事をしています。

中学生の実習受け入れ

今後の実習・雇用の受け入れについて確認したところ、総務課長の塩見重之さんは、「本人の自立支援の一助としてお役にたてるなら、喜んで体験実習や雇用の受け入れ先として協力します」と話していました。

今年度、近くの中学校の特別支援学級で学ぶGさんが体験実習を希望しました。

そこで開拓員が塩見さんに再度状況確認をすると、会社の代表の許可を取り、OKの返事をくれました。

「ただ、中学生の実習は初めてなので、どんな仕事を任せればいいのか相談したい」と聞かれ、Gさんの担任教諭を紹介しました。

担任教諭にしっかり確認

塩見さんは、訪れた先生からGさんのことを詳しく聞きました。

障害の程度、得意なこと、苦手なこと……。先生は、「言葉で説明されると誤解することがあるが、手本を示してくれば理解できる」「自分の気持ちを言葉にすることが苦手」「時計を読んで時間の感覚をつかむことが難しく『あと10分で仕事を終わらせなければならない』とは理解しても、

感覚の理解ができず
終われないことがあるが、『終わらなくても10分経ったら

知らせる』ことはできる」など、必要と思われることを伝えました。

実習期間	1週間×1回
実習生	中学校特別支援学級3年
実習内容	介護補助

いろいろな仕事を経験してもらう

先生の説明で、「理解できる語彙が少ないと利用者の傾聴は難しい」と判断した塩見さんは、障害のある先輩と一緒に清掃の仕事をしてもらおうと考えました。

しかし、その方が自分のペースで仕事をしているため、実習生が入ると影響が出る可能性を心配しました。そこで「せっかくの実習だから、いろいろな仕事を経験してもらう」ということになり、利用者の居室から交換したリネンを運搬したり、物品を補充したりするなど、介護職員の補助的な業務を体験しました。

受け入れ側が気負わず自然体で

職員はシフト勤務のため、Gさんの指導をする人は日によって変わりました。そのうちのひとり、ケアスタッフの石川成子さんは、「記録ノートの線引き、汚物を包む新聞紙たたみなどをお願いしました」と言います。「その人のできることをやってもらえばいいと思い、ひとりに任せてしまうのではなく補助的な仕事を頼みました。できなければ無理することはないので」。



「紙の飾り花を作ってもらったとき、彼女はていねいに折り目を開いていたので時間がかかりました。でも、根を詰めて作業するのが苦手そうだったので、結局1個作って終わりになってしまいましたが、それはそれでいいと思っています」と、「こちらが気負わず自然体で受け入れればいいのか」と振り返りました。

その人の持っている力を引き出す

石川さんは、Gさんが通う中学校の近くに住んでいるので、休憩の時に彼女と学校の話をするなどして、緊張が解けるように気を配ったそうです。

塩見さんはそんな職員の皆さんを信頼しながら、「あらかじめその方の特性を知り、持っている力を引き出すことができれば、と思って実習を受け入れました」と話しています。

「今後も、地域で実習を望む方があれば、できる限り受けていきたい」と、塩見さんは言ってくれました。

彼女は、最初は不安そうでしたが、すぐに馴染んで、最終日には「楽しかった」と言ってくれたのはうれしいですね。

その人の良いこともそうでないところも知っておけば、自然に接することができて、それほど困ることはないと思います。



ケアスタッフ
石川成子さん



従業員増加で障害者雇用に力を入れる

全国の2,400ヶ所の学校、病院、企業などで給食業務を受託をしているこちらの会社では、以前から障害のある方を雇用していましたが、受託する事業所が増え従業員が増加したため、更に力を入れることになりました。

千葉事業部では、学校給食として初めてとなる市立船橋特別支援学校(船橋市金堀町)から業務受託をすることになりました。本社から「実習、雇用を受け入れたい」と話があったことから、検討を始めました。

学校以外にも、障害者関係施設で給食業務を受託しており、障害のある方の雇用が進めばと考えたそうです。

千葉県特別支援学校を集めた説明会

そこで昨年度、「県内特別支援学校就労支援ネットワーク連絡会」を利用し、県内の12校を対象に説明会を開催。

事業部長の高木恒子さん、第4課3係長の森 絢子さんが特別支援学校進路担当教諭を前に会社の事業を説明し、受け入れ候補として6つの事業所を紹介しました。これらは、特別支援学校、障害者福祉施設、保育園などの厨房で、障害のある方の雇用については既に理解を得ているところでした。

その他、千葉事業部での事務作業についても、可能性があると説明しました。

特別支援学校とのつながりを作る

説明会で森さんは、「これまでの取り組みは、現社員の中から手帳保持者を確認したり、自分の知り合いから紹介してもらって新たに雇用したりする程度でした。もっと雇用しなければならないとわかっていても、どう募集すればいいのかわからなかったのです」と話し、「広く受け入れるため、特別支援学校とのつながりを作りたい」と言いました。

この後すぐに、保育園でひとりの実習が実現し、翌春には雇用に至りました。



今年度は高等部から約10人

年度が変わり、高等部1～3年生の10人ほどが実習をしました。森さんも現場を訪れ、事業所の責任者から意見や感想を聴取したそうです。

実習期間	2週間×3回	2週間×2回
実習生	特別支援学校高等部3年	特別支援学校高等部3年
実習内容	事務	調理補助

その中で、肢体不自由のHさんは、千葉事業部で事務の実習をしました。事務作業に支障はないのですが、歩行が困難で電車の乗り換えが心配でした。しかし、何度か実習を重ねることで、Hさんも事業部の皆さんも、仕事や通勤に自信をもつことができたそうです。

また、知的障害を持つIさんは、自校の給食室で実習。いつも通っている学校でいつも一緒に過ごす仲間を見ながらの仕事で、気持ちの切り替えが難しかったようです。しかし、先生たちが他の生徒に「Iさんは仕事をしているのだから声をかけてはいけない」と注意し、Iさんにも仕事に集中するよう言いました。また、他の生徒が食堂を使う時間には厨房の奥で作業できるように職場の皆さんから気を配ってもらい、最後までがんばることができました。



雇用した後の配慮を考える

高木さんは、「春には実習をした3年生数人の採用を考えています」と言います。「Hさんには、自宅の最寄り駅からここまで直通電車がある時間帯での出勤を検討しています」と、配慮を示しました。



「2ヶ月に1度、千葉事業部で地区責任者の会議が開かれるので、そこで障害のある方を受け入れた例を紹介し、新たに受け入れられる事業所を募っています」と、森さん。現場にもひんぱんに顔を出し、よい関係を作っているため、協力してくれる事業所が増えるのかもしれない。

当社で、特別支援学校とのつながりを持っている事業部は、千葉の他にはあまりないようです。千葉では、給食受託事業所が200ヶ所ほどあり、今後は企業の食堂でも障害のある方の受け入れを考えています。



事業部長 高木恒子さん(左)、
第4課3係長 森 絢子さん



施設で初めて障害のある方を雇用

高齢者の自立支援をサポートするこちらの施設では、平成 26 年から知的障害のある J さんが働いています。

特別支援学校在学中に 3 回の実習をして、採用されました。施設にとって、J さんが初めての「障害者雇用」です。

仕事は、介護の補助業務。J さんは「ヘルパー 2 級」の資格があるので、食事・軽食介助の補助（テーブル拭き、使用済みエプロン・おしぼり回収など）、入浴・清拭介護の補助（清拭車の清掃など）、リネン交換をしています。

J さんは 2 階に配属され、毎日、スタッフからチェック表にサインをもらっています。総括担当は、医療部長の峯由紀子さんです。

相手のことを考えて動くことができる人

J さんの仕事は朝 9 時から。タイムスケジュールを見ながら業務をこなしますが、介護の資格があるので利用者に直接触れる、入浴後のドライヤー介助、足を拭き靴下をはかせるなどのケアも行います。

峯さんは J さんを、「相手の様子をみて接することができる」と評価します。利用者ひとりひとりの顔と名前を覚え、しっかり目を合わせて相手に恐怖感を与えないように話ができるそうです。「ドライヤーをあてる時も、『人に接している』という意識をちゃんと持っています」。

開拓員も、J さんの働く様子を見学しましたが、穏やかな表情とやさしい手つきでドライヤーをあてていて、利用者も安心して任せていることがよくわかりました。

ちょうど、福祉の専門学校から実習に来ていた方が、J さんに「〇〇はどこにありますか？」と聞き、彼がその場所を教えている場面を見ました。ちゃんと人の話を聞いていることに、感心しました。

現場の良い指導の結果

J さんは、実習ではデイサービスのお茶出しや食器洗い

などをしていました。

それまでも障害のある方がボランティアに来たことはあっ

たそうですが、雇用を見込んだ実習の受け入れは初めて。当時の担当者は、特別支援学校の進路指導教諭と打ち合わせをし、「レクリエーションの手伝いや洗濯物の仕分けなども可能かもしれない」と判断した上で、3 回の実習の中で、シーツ交換まで頼んだそうです。

秋の実習で落ち葉かきを頼んだ時のこと。職員が枯れた花を摘んでいるのを見て、自分からゴミ袋を持ってきたそうで、この頃から機転を利かすことができたようです。

現在では仕事のエリアが増えました。峯さんは、「J さんは業務を確実にこなしますし、場所が変わっても物怖じしないのがいい。ここまで来たのも現場職員の良い指導の結果です」と話します。

ステップアップのために

峯さんは、「J さんにはさらにステップアップを目指してほしいので、他の職員同様に言葉遣いや利用者への言葉かけを指導しています」と言います。

J さん自身も、「毎日の仕事をチェック表で確認してもらっていますが、その手間をかけなくてもよくなるようにがんばりたい」と、意欲を見せます。

20 歳を過ぎて生活面での自立も目指している J さんに対し峯さんは、「プライベートでトラブルにあうこともあるでしょうが、困りごとは相談し、自分で解決できるようになってもらいたい」と期待します。



働く経験を公の場で発表

今年度、障害のある方が実習や仕事の体験を自らの言葉で発表する、市の事業が開催されました。

そこで J さんは、現在の仕事の様子や働くことに対する自分の気持ちを、自らの言葉でまとめて発表。学校では生徒会長を務めた J さんですが、「緊張した」そうです。

それでも堂々とした話しぶりに、来場の皆さんは感動し、惜しみない拍手をおくっていました。

彼の障害は軽度なので、見た目では「ハンディのない若者」として接していると戸惑うことはあります。

彼には「認めてもらいたい」気持ちが強くあるようです。私も、褒めて成長してもらうように心がけています。「あなたはいなければならない人」と、日頃から声をかけています。



医療部長
峯 由紀子さん

ふなばし あったかampaにー

船橋市障害者雇用優良事業所表彰

「障害のある方を多数雇用し、働きやすい環境を作るための工夫をしている」「職場実習の受け入れを積極的におこなっている」など、障害者雇用に関する優れた取り組みをする市内事業所讃えるため、平成26年度から表彰をおこなっています。

表彰事業所の取り組みを広く公表することで、雇用を検討する事業所の参考にしてもらいたいと思っています。

今年度、応募のあった市内事業所について審査をおこない、以下の3事業所が表彰されました。



- ◎株式会社鈴徳 船橋営業所（金属リサイクル）
…職場実習を積極的に受け入れ、取り組みを業界団体に広めている。
- ◎三和商事株式会社（保健衛生用品卸）
…小規模の事業所だが、本人用のマニュアルを作成するなどして継続雇用している。
- ◎株式会社船橋リサイクル（再生資源処理）
…専任の指導員を置き、多数を長期にわたり雇用している。

※取り組みの内容は、船橋市ホームページで詳しく紹介しています。



社会人への第一歩 一緒に働こう！

障害者職場開拓における職場実習・雇用受け入れ事例集 No. 6

発行：平成29年3月
文責：船橋市経済部商工振興課経営労政係
船橋市湊町2-10-25
TEL：047-436-2477
FAX：047-436-2466
<http://www.city.funabashi.lg.jp/>